

[011_1982]第十一回中央図書館貴重文物展観目録： 物語文学：竹取・大和・宇津保・源氏物語

九州大学附属図書館中央図書館

今井，源衛
九州大文学部：教授

<https://doi.org/10.15017/1485007>

出版情報：大学広報．438，pp.1-9，1982-03-20．The Committee of Public Relations Kyushu University
バージョン：
権利関係：

大学広報

No.438

昭和56年3月20日発行

(編集)

九州大学広報委員会

第十一回中央図書館貴重文物展観目録

(中央図書館)

物語文学 — 竹取・大和・宇津保・源氏物語 —

は じ め に

教職員や学生諸君が多数来館されるよう希望します。

なお、前回にひきつづき展示資料の選定、解説、指導、配列等について
文学部今井源衛教授に多大の御尽力を頂きました。ここに厚く御礼申しあ
げます。

記

展示場所 : 中央図書館メインロビー

展示期間 : 昭和57年3月23日(火)から

〃 57年4月10日(土)まで

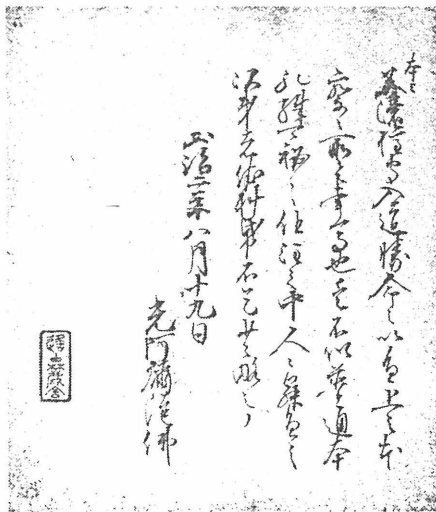
展 観 資 料 と そ の 解 説

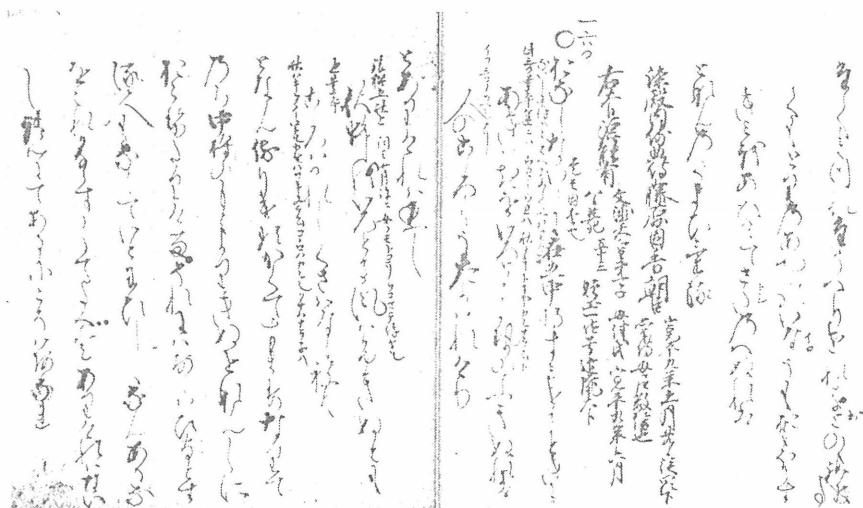
平安時代前期の物語文学は、日本文学史上でも一つの大きな潮流をなしている。竹取物語に始まる作り物語の叙事性、伊勢物語に始まる歌物語の抒情性、更には宇津保物語にみられる長編指向などが一つとなって、源氏物語という、世界にも比類のない巨大な作品へと流入していくのである。

今回の展示では、源氏物語に至る物語文学という観点から、竹取・大和・宇津保・源氏物語及びその注釈書を数点ずつ選んでみた。猶、伊勢物語は前回の展示と重複するため割愛した。

最後に、図書館の特別な御配慮により、重要文化財大和物語を展示作品の中に加えることができたことを付記しておく。

一、大和物語 重要文化財、昭和53年3月指定





支子文庫本。柙型本(15.5×14.2cm)綴帖、一帖。表紙は薄い金茶地に菊牡丹唐草文様を織り出す緞子。中央題策に「大和物語」と墨書。内題なし。見返しは上部に遠山海波雲霞描、中部に雲形に金銀砂子を散らし、下部に金泥墨筆による海辺芦屋文様。裏表紙見返しは海辺に雲月を描き、右下隅に「竹村氏」の文字がある。旧蔵者の署名か。本文料紙は鳥の子、雲母引き。墨付七八丁。遊紙は巻頭に一丁。本文は一面八行、一行一六～二〇字。末尾に「正治二年八月十九日、光阿弥陀仏」の奥書をもつ。院政期の著名な歌人勝命の所持本、所謂「勝命本」を正治二年(1200)に写したことを語る奥書であるが、本書はその冒頭に「本云」とあり、祖本の奥書をそのまま転写したもの。但し、料紙・墨色・筆致等から見て、正治二年をさほど下らぬ鎌倉中末期の書写である。

通行一三四段より一七二段までの零本。本書は大和物語の全伝本中、弘長二年(1262)写の為家筆本と共に現存最古の写本である。その本文も流布本諸本(二条家本系統)とはかなり異同があり、六条家本の系統をひくものと推定される。

又、本書の注目すべき特徴として、行間に有する豊富な勘物があげられる。他本に比して約十倍にも達するそれらの中には、新資料や現存しない佚書の本文等のほか、鎌倉初頭の古典諸本の状況を知るよすがとなるものも少なくなく、資料的に極めて重要である。

下巻のみの残存本であるが、本書は本学図書館の和書の中でも最も貴重なものと言えよう。

二、竹とり物語 絵 巻

文学部蔵本。卷子本、三巻。表紙は華龍文繋ぎの緞子(32.8×19.8cm)、紐は萌黄色の平織。左上部原装絹題簽に「竹とり物語 上(下)」「竹とりもの語 中」と墨書。見返しは金布目、本文料紙は鳥の子、裏は銀切箔散らし、軸は木製、軸頭は象牙。木箱中央に打付書で「第貳拾五号、竹取物語、三巻」と墨書、近世中末期の筆か。

詞書は通行本。細みの流麗な書体。極彩色の絵は上中下巻各二面ずつ、計六面存する。竹取物語の絵巻は十数点知られているが、本絵巻は絵の少なさで異色である。又、画面を際立たせるためか、上下の雲型が濃く大きく描かれている。近世中期のものであろう。

三、竹とり物語 奈良絵本

支子文庫本。大本(24.2×18.0cm)綴帖、二帖。近世中期写。花鳥文様の金襴緞子藍地表紙左肩に下巻のみ「竹とり物語 下」(題簽)と外題を記す。本文と同筆の原題簽。上巻は剥落した跡がある。内題「たけとり物語 上(下)」。見返しは金泥布目文様。紙数は順に三〇丁・二六丁で、内墨付二八丁・二四丁。共に巻末のみ遊紙二丁あり。本文料紙鳥の子。一面一〇行。

本文は流布本の正保版本系。挿絵は上巻に七面、下巻に六面存し、巻末の余白は本文を散らし書きにする工夫がみられる。

奈良絵本の体裁には一般に、横本仕立てのものと、本書のような縦本の大本型があるが、後者の方が比較的古い形である。

掲出個所は貴公子達の奏する笛の音を聞く隣室のかぐや姫の図。金銀の箔や砂子をふんだんに用いた豪華さ、襖絵や衣服の文様・顔の表情等細部まで描く巧みさ、鮮やかな色彩は、本書を奈良絵本として優れたものとしている。

四、^{絵入}竹とり物語 刊年未詳

支子文庫本。大本(26.6×18.1cm)袋綴、二冊。整版。表紙は藍地に打雲秋花文様を配す。中央刷題簽に「^{絵入}竹とり物語 上(下)」とある。四周単辺(19.8×14.1cm)本文一面一一行。上巻二二丁、下巻一九丁。絵はそれぞれ六面ずつの計十二面存する。

竹取物語は、慶長頃の古活字版の印行に続き、正保三年(1646)整版本が出され、後この正保版本の刊記を改め絵を入れるに至り、更に刊記を取ったものが「^{絵入}竹とり物語」として広く流布した。本書もその一本である。下巻末左隅に「茨城多左衛門板」とある。

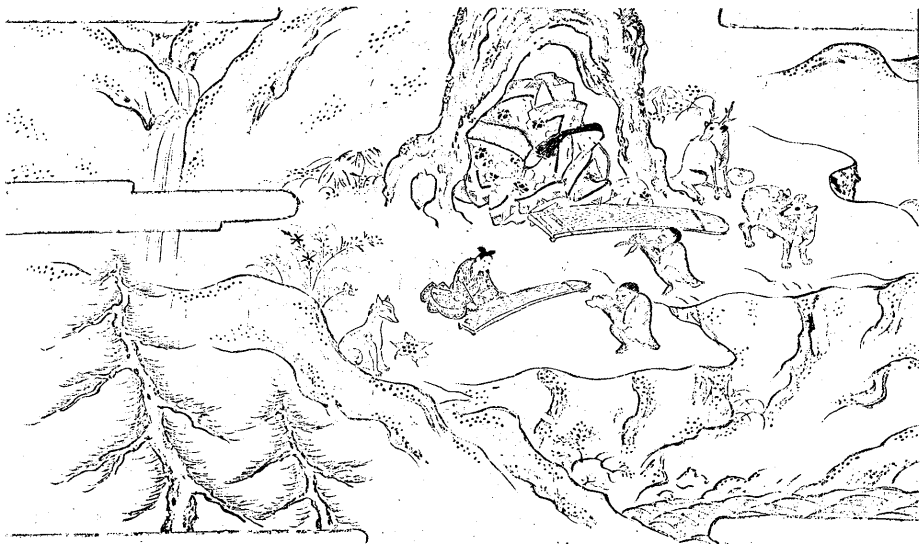
五、竹取翁物語解 田中大秀著

支子文庫本。大本(27.4×18.2cm)袋綴、六冊。整版。表紙は黄色布目地で下方に波菱文を配す。左肩の双辺刷題簽に「竹取翁物語解 首(〜五)」とある。四周単辺(19.9×14.6cm)。本文は一面一〇行。一冊平均五〇〜五五丁。首巻は師本居大平の序(文政十一年十一月)・田中大秀の自序(文政九年十一月)・竹取物語の解題、と続き、後半は附録として「妻あらそひ」「月のみやこ」等の項目毎に古今東西の文献を掲げ、自説を付す。次巻以降は注解。五巻々末に鈴木朗の跋文と「天保二年^{辛卯}初夏」の刊記を有する。

著者田中大秀(1777-1847)は江戸中期の国学者・歌人。本居宣長・大平に師事した。

本書は、竹取物語の注釈書。近世に始まる竹取物語研究史上、ごく初期に位置し、しかも後代に最も大きな影響を及ぼした書である。とりわけ、その本文は、乱れていたそれまでの本文を諸本によって校訂しており、昭和初期まで流布本の位置を占めた。

六、うつほ物語 俊蔭巻



細川文庫本。卷子本五巻。(32.4cm×8m61cm~10m18cm)寛文頃の書写。表紙は改装、金襴に草花襷文様。左肩原題箋に「うつほ物語 一(〜五)」と墨書。料紙は鳥の子紙。内容は俊蔭巻全巻。極彩色の絵(32.4×48.8cm)が巻一から順に三・三・五・三・五図の計一九図ある。巻序が内容と矛盾する。正しくは巻三・二・五・四・一の順。題箋の誤貼によるものか。奥書の類はない。

宇津保物語の絵巻としては、他にはほぼ同時代の作と思われるものに天理図書館本がある。本絵巻はそれと共に双壁と言われている。

揭示箇所は、仲忠親子が零落し都を離れて北山の杉の大木の洞の中で生活を始め、弾く琴の音が狼や虎などのけだものを魅了し、狼が木の実などを持って来た、という著名な場面。この「うつほ」住みがそのまま全体の巻名となっている。

七、うつほ物語 文化三年補刻版 細井貞雄書入本

おとなし
音無文庫本。大本(26.3×18.3cm)袋綴二八冊。整版。藍表紙左肩刷題箋に「うつほ物語 俊陰 二止今板本十六の巻、二古本一の巻」のように巻名をも記す。文化三年補刻版本。四周単辺(19.7×15.3cm)、一面一一行。水野忠央の「新宮城書蔵」朱方印、細井貞雄の「詞華堂」朱方印を各巻にもつ。

宇津保物語は古来より本文に乱れが存し、錯簡・竄入が甚しく、その巻序すら一定ではない。したがって、近世以来、原型復原へむけて様々な試みがなされているが、細井貞雄も流布の板本に大幅な手を加え、独自の巻序・本文校訂を行った。本書に見られる如く、夥しい異文校合・本文訂正、更には数枚に亘る板本本文の省略・補筆・差替えを行っている個所もある。

本書の特色は、貞雄によって記事の先後・重複などが大きく訂正されており、流布本諸本に比べて矛盾が少ないことである。この貞雄の校訂作業を厳密なものとするか否かで、本書の価値評価は大きく分かれるが、本書の優位性・最善本説を一貫して主張された方に河野多麻氏がいる(古典大系解説参照)。反論も強く、学会の定説とはなっていないが、所謂「九大本」として常に論議の尽きぬ本である。

細井貞雄(1772-1823)は本居門下の国学者。

八、空物語玉琴 細井貞雄著

音無文庫本。大本(27.0×18.5cm)袋綴。二冊。整版。縹色布目鳥の子表紙。左肩の

単辺刷題簽に「玉琴 一(二)」とある。内題は「空物語玉琴一の巻(二の巻)」。本文は四周単辺(19.4×14.9cm)。巻一が四二丁、巻二は四七丁。一面一〇行。一行三二字前後。巻二巻末、単辺枠内に「詞花堂蔵板」とあり、続いて細井貞雄著の既刻・未刻本の広告、及び「文化十二年乙亥七月、製本所江戸中橋廣小路西宮彌兵衛」の刊記がある。全五巻であるが、広告にある三巻以降は出版されず、写本の形でのみ伝わる。

本書は「うつほ物語」の研究書で、総説・年立・系図・巻別梗概等から成る。

前述、細井貞雄の研究の成果である。

九、うつほ物語 延宝五刊 鈴木朗書入本

文学部蔵本。大本(26.2×17.9cm)袋綴。整版。二〇巻三〇冊。藍表紙左肩の刷題簽に「うつほ物語^{としかけ}_上」のように巻名も付記する。各巻平均五〇丁。四周単辺(20.2×15.5cm)、挿絵が各巻平均五面ある。各巻々首の「櫻山文庫」印から、伊勢神宮大官司をつとめ、皇学館の設立・古事類苑の出版等を手がけた鹿島則文の蔵書であったことがわかる。

うつほ物語の延宝版本の伝本は稀少ではないが、本書の注目すべき点は、本文行間や上部空白等随所に存する書入である。第一冊見返しの朱筆「丁丑夏ヨリ會読^{田中道}マロ校合書入本トアハセ書入」、及び第三〇冊末尾朱筆識語「文政二年己卯八月十八日田中道麻呂校合之以本書入畢、鈴木朗」から、この書入が鈴木朗によって「丁丑」(文化十四年1817)から文政二年1819の間に施されたことがわかる。書入は一筆であるが朱墨青茶の四通りで、その多くが惟通・直政・朗という名を伴う。識語にいう田中道麻呂本の校合に加えて、會読の際、弟子の栗田直政など各人の説をも書込んだものか。

鈴木朗(1765～1837)は本居宣長・春庭門下の国学者。

一〇、源氏物語 古活字版

文学部蔵本。大本(26.3×19.1cm)袋綴。五四巻三〇冊。藍表紙中央の後補題簽に「桐^{つほ}_{はき木}一」の如く巻名を記す。見返し共紙。本文料紙は楮紙。一面一一行。一行二一字。字高21cm。一卷は四〇～七〇丁。刊記はない。第一冊巻首右肩に旧蔵者であろうか、「細川實」(未詳)朱印がある。第一五冊以前に読点・振り仮名・合点・傍書が朱墨二様で施されている。

源氏物語の古活字版は慶長版・元和九年版・寛永版がある。本書はそのうち、元和九年刊本によって寛永中に刊行された、所謂「寛永中刊無刊記本」の久原文庫本第二種と一致する。この版は慶安頃に出た絵入整版本の基となったもので、伝本は今日数点を数えるにすぎない。

宗祇著

有抄宗祇法師與物語傳院次一部、
 内偏次能操雅啓、
 詔問、
 後、
 今管城子と寫之、
 親者、
 下時文明十三年、
 實隆

宗祇（１４２１～１５０３）は室町後期の代表的連歌師。古典を一条兼良に、和歌を飛鳥井雅親に学び、東常縁から古今伝授を受けた。源氏物語研究書としては他に「雨夜談抄」がある。

藤原定家著

源氏物語奥入
ふうはか
候行

- 8 -

されていたものが、後に一冊にまとめられたと言われる。内容は引歌引詩・難義語釈等の簡略な注。初期の源氏物語研究の典型をなす。

現在、奥入はその内容・分量・形態によって諸本を第一次本・第二次本・その他に大別するが、その成立段階については諸説存する。

本書は所謂別本系本文に属し、第一次本と第二次本の間続的存在であるため、今後の「奥入」研究においてその資料的価値は注目されるところである。

一三、袖 鏡

細川文庫本。大本(3 2.7×2 5.2 cm)袋綴、五巻五冊。原装薄茶表紙中央に二冊目以下は打付書で「袖かゝみ 二(～五)」と外題を墨書するが、一冊目は破損のため欠く。本文と同筆。内題なし。墨付は順に八八・一〇九・九一・七〇・七五丁。遊紙は第一、第五冊が首尾に各一丁、他は首のみ一丁存する。一面九行書。各冊巻頭に「鑒水」(未詳)の朱方印をもつ。奥書識語の類はない。

中世には源氏物語の梗概書として源氏大鏡・源氏小鏡等が作られたが、本書は源氏大鏡二類本に属する一本である。源氏物語中の和歌を殆んどすべてあげる他、本文を省略しながら梗概を述べたり、引歌引詩・語釈等を記す。本書の特徴は、巻頭や本文中において源氏物語の原文を相当量そのまま用いている点にある。これは中世に流布した源氏物語本文の系統を知る上の貴重な資料となる。

又、書写時期は慶長前後と推定され、源氏大鏡諸本の中でも極めて古いものである。